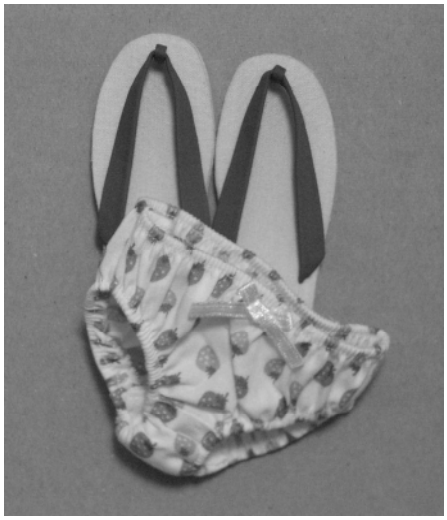
巻頭の言

～ なぜ、フランス革命は起こったのか？ ～

今日、ひとりの少女(une fillette)が死んだ。



ノートルダム橋の欄干の下にちょこんと揃えて置かれた可愛い庶民靴といちごパンツ。

これはおそらく、パリ市を流れるセーヌ川へと身投げをした少女が、短く儚い人生の最後に身に着けていたものであろう。

下水処理がまだ未整備であった当時、糞尿などが容赦なく流れ込んだセーヌ川は、（現在とは大きく異なり）恐ろしく不潔であったらしい。

貧しき少女は、おのれの死をまえにして、たったひとつの大切な宝物であった『いちごパンツ』を、泥水に浸すことを躊躇ったのではなかろうか。

たとえその身が汚れに染まっても、いちごパンツだけは守りたい……、この世に生きた証として!

この少女の崇高な魂は、フランス全土を震撼させ、多くの人々の心を燃え上がらせた。

いちごパンツが眩しかったから；

……グルノーブルで屋根瓦を投げちゃいました。（バルナーブ）

……興奮のあまり、バスチーユを襲撃しちゃいました。（パリ市の民衆たち）

……オーストリアとプロイセンに宣戦布告しちゃいました。（ジロンド派議員）

……「ラ・マルセイエーズ」を作詞作曲しちゃいました。（ライン軍団の工兵大尉）

「……っていうか、ブルマがなければハーフパンツを穿けばよいでしょう？」
（王妃マリー・アントワネット）

君よ、市民よ、穢れなき少女の声なき慟哭を聞く心あらば、
今こそ知れ、赤は《革命》と《いちごパンツ》の色であると！

……そして、フランス革命は起こった。